

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K17807

研究課題名（和文）異言語話者間の学習をめぐるフィルムエスノグラフィー

研究課題名（英文）Film ethnographic inquiry of learning in multimodal communications

研究代表者

鷲谷 洋輔（WASHIYA, Yosuke）

東北大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：60786276

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、主にカナダトロント郊外の柔道道場における活動を研究対象としました。異なる言語話者が集う社会空間ゆえに、言語記述的な説明を尽くすことには限界があります。現場での実践は、そうした限界に対して言語的な記述を積み重ねるよりも、むしろ言語記述を約めることで独特の対処や学習が生起している側面を参与観察を通じて明らかにしました。さらに、暗黙知・明示知に代表される「言語化の可否」に基づく対置構図ではなく、「言語化するかしらないか」という行為の次元から学習実践を再考する可能性を、オイゲン・ヘリゲルの弓術論を敷衍するかたちで提起しました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル化が進むほど、言語コミュニケーションは複雑になっています。言いよどみや間違い、誤解が絡み合っているのが現状です。本研究はこうした今日的な状況を鋭く反映している身体実践・学習実践に注目し、「言葉にしない」ということの実際とその可能性を新たに提起するものとなりました。

さらに、こういった身体実践を検証する研究者の取り口がこれまで言語記述に大きく規定されている方法論的な限界をふまえ、ビデオカメラを用いたフィルムエスノグラフィーを取り上げました。その方法論的な可能性を、非言語的な情報の追加ではなく、言語的情報の削除に見出したこと（「引き算的メタメソドロジー」）が本研究の重要な成果です。

研究成果の概要（英文）：This study focused on a judo club located in the north suburb of Toronto, Canada. Due to the diverse linguistic background of the participants, the practice of learning/teaching judo did not fully depend on detailed explanations or descriptions of movements. Instead, this study illuminated that their practices were omitting and subtracting linguistic descriptions. By drawing on the classic work of Zen and Japanese archery by Eugen Herrigel, the study provoked a subtractive meta-methodology to understand learning with and without linguistic descriptions. This novel method provides an alternative to the common binary framework where learning is a matter of knowledge in either the tacit or explicit dimension.

研究分野：身体文化論

キーワード：質的調査法 エスノグラフィー 身体知 学習 スポーツ

1. 研究開始当初の背景

異なる言語を母語とする人びとが集う社会空間においては、そこで展開されるコミュニケーションは一層複雑になってくる。カナダにおける柔道道場に関するそれまでの調査を通じ、この点を目の当たりにしてきた。これを通じ、本研究が着目したのは「コミュニケーションの複雑さこそが学習を可能にしているのではないか」という逆説的な問いであった。通常、コミュニケーションにおけるこうした複雑さは取り除くべき障害とされる。その上で、学術的な検証の焦点は、その問題と対策を論じることに置かれてきている。「コミュニケーションの複雑さが学習を導く」というような逆説的な設定自体がなされることも、それゆえに少なかったと考えられる。この根底には、社会科学のアプローチが「検証対象についての記述」を前提としてきた点も指摘できる。記述を重ねる事が検証の軸とされてきたが、ノルベルト・エリアスが指摘する通り、記述は常に現実の流れを堰き止め、縮減する (Eriass, 1978)。こうして研究対象となりえるものは「記述によって分節されるもの」としてあらかじめ設定され、学術的な検証はその前提に即してなされるという制約を帯びる。これは、対象の全体性やそこで生起する複雑さとらえることよりも、既に把握されたものとして対象を検証することが主流を占めてきたことにも通じている。

2. 研究の目的

以上を踏まえると、「複雑さが学習を導く」という逆説は、新たな分析視角から学習論を検討する知見となりうるのではないか。さらにいえば、こうした視角を検討することは学習論そのものを改めてとらえなおす方法論的な再考にもつながるのではないか。

この二重の問題意識から、異なる言語話者同士の身体実践とそこでの学習に注目し、その複雑さをとらえることを本研究の目的とした。異言語話者が集う社会空間への着目は、訛りや誤解、言い直しや無言といった複雑さや多様な言語的实践を無視できないリアリティとして取り扱う視点を喚起する。また、言語記述に限らないアプローチとして映像撮影を取り入れることで、研究もまた言語記述的なアプローチの限定性を超えた新たな方法論的な知見を目指すものとなった。

3. 研究の方法

カナダ、トロント北部のC道場を対象とする参与観察によるエスノグラフィーを中心とした。聞き取り、インタビューに加えて、映像撮影を用いるフィルムエスノグラフィーを用いた。さらに、日本国内、ニュージーランドにおける身体運動と言語に関わる学習実践のフィールド調査を併せて行った。

これと並行して先行研究の整理と検討を進めた。特に、異言語話者同士のコミュニケーションと学習実践に関する研究としてオイゲン・ヘリゲルの弓術論を取り上げた。また、映像を用いた方法論的な検証と考察のために、フィルムエスノグラフィーに関する先行研究、さらにアンリ・ベルクソンによる映像論、時間論を検討した。これらをもとに、参与観察で得られた知見の理論的考察を展開した。

4. 研究成果

言語化可能なことがら(明示知)と不可能な事柄(暗黙知)という構図で二分されがちな身体実践の学習に、「言語化するか否か」という新しいフレームワークを整理し、提示したことが研究成果の一つである。この点をオイゲン・ヘリゲルの弓術論を糸口に検討することで、暗黙/明示や西洋/非西洋といった二項関係に縮減されがちな学習実践の検証を、「言語記述化」という具体的な行為の問題」としてとらえ直すアプローチを提起するものとなった。

さらに、アンリ・ベルクソンの時間論を検討し、暗黙知論をはじめとするフレームワークは研究者が採用する言語記述という(メタ)方法論に大きく影響を受けていることを改めて考察した。これを通じ、映像撮影という新たなアプローチにおける時間的な可能性と限界とを指摘した。言語至上主義を乗り越える方途として映像撮影を採用する研究が多いなかで、映像撮影の方法論的な意匠は「時間の空間化」の扱い方にこそある、という新たな論点を示すものとなった。

なお、前者は論文「体感のアンビバレント」(『社会学論叢』、日本大学社会学会編、2020年、198号)に発表しており、後者については複数の論文にまとめ、現在査読審査中である。

さらに、本研究を通じて「引き算的方法論」という新たな方法論を整理し、提起するに至っている。この意匠は、昨今の質的調査法をめぐる議論や研究活動と芸術活動への近接にも通じており、研究成果(product)と研究活動(production)の断絶と連関に新たな光を中てるものにもなる。ThriftやVanniniらが提唱するNon-representational methodologiesに通じるアイデアでもあり、研究活動を起点に学術的な知を展開していくことができると考えている。非西欧的な知見への関心も高まっているなかで、東洋的な身体作法や武芸、芸術に触発された新しい観点を提示するための枠組みとしての可能性も考えられる。

本研究の実施に際しては、調査者、協力者それぞれの事情や新型ウィルスの問題等で当初予定

したテーマや研究課題をすべて取り上げることはできなかった。学習論に関する検証も大きな余地を残しており、今後より深く掘り下げるべき論点が多く残されている。身体化(embodiment)、表象(representation)に関する議論は特に重要なものであり、本研究が射程として取り扱う意義と可能性も大きい。さらなる検証と考察、およびその具体的な成果の提示を今後の課題とした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鷲谷洋輔	4. 巻 198
2. 論文標題 体感のアンビバレント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yosuke Washiya
2. 発表標題 An invitation to 'Ethno-Kinesiology'
3. 学会等名 World Congress of Sociology of Sport (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yosuke Washiya
2. 発表標題 'Experiencing the Moving Body Through "Thin-Description" -an Invitation to Ethno- Kinesiology',
3. 学会等名 14th Annual LIMINA Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yosuke Washiya
2. 発表標題 Bricoleur to Sculpteur - film based inquiry and new methodological horizons
3. 学会等名 6th International Conference on Qualitative Research in Sport and Exercise (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------